

速水御舟

《京の家・奈良の家》



速水御舟(1894-1935)
《京の家・奈良の家》

1927年
紙本彩色・額装
各64.6×129.3cm
平成25年度購入

右

に京都、左に奈良の民家を描いた、第十四回再興院展出品作です。十月十四日まで「MOMATコレクション」展でお披露目しており、ご覧になった方々から「抜群にかわいい」との感想が寄せられています。「かわいい」のは、《奈良の家》の三角屋根の絶妙な位置に二ツ穴があるために、まるでとぼけた顔のように見えるという理由の一つでしょう。

ところで、二川幸夫氏の撮影した『日本の民家一九五五年』(ADAエディタールキョー、二〇一二年)や『日本の民家 大和・河内』(美術出版社、一九五七年)を見ると、かつて二階堂村、法隆寺村、白毫寺集落など奈良のあちこちに、しかもたいへん数多く、このような大和棟の民家があったことが分かります。二ツ目のように見える穴も、屋根に乗る鳩の瓦も、どうやら珍しくはなかった様子。となると、取材地こそ特定できていないものの、「かわいい」奈良の家は必ずしも御舟による創作ではなかったといえそうです。

「かわいい」要因の二つ目として挙げられるのは描写の単純化です。例えば、《京の家》の黄色い家は斜めから見ているはずなのに、下の方では奥へ向かって収斂してゆく遠近の法則から離れ、横方向の線がことごとく水平にひかれています。つまり、ここでは、正確な建物の描写や奥行表現よりも、平面上の造形要素の整理

が優先されているのです。そうすることで画面には軽みが生まれ、同時に、数本の直線にまとめられた、建物と空とを分かつ境界がより強調されて目に飛び込んでくるようになります。奥行の浅さは《奈良の家》も同じ。こちらでは中庭に地面が描かれたことで、空間の歪みが一層露わになっています。

奥行表現を抑制して平面化を目指すやり方は、一方では東洋の古典芸術を研究した成果として、他方ではモダニズムや構成主義への接近として、日本画では複合的に現れました。あえてモチーフに建物を選び、線と面の統一と整理を目論んだと思しいこの作品は、後者を意図したものと見てよいでしょう。御舟は続く《女二題》(一九三一年、福島県立美術館蔵)、《花の傍》(一九三三年)において、一層自覚的に、モダニズム風の平面構成に取り組んでゆくことになるのです。

さて、この作品が「かわいい」と感じられる要因はまたあります。細部に施された描線が、その表すべきかたちと正確に一致しないことからくる素朴感だとか、色を塗った上から磨いたらしいつやつやとした質感だとか。そうした一つ一つの表現に隠れている作者の意図とは何か。「かわいい」だけで終わらせてしまわずに、ぜひ会場で思考をめぐらせてみてください。

(美術課主任研究員 鶴見香織)